

青春の彷徨(仮題) 松本清張氏の同名の有名な本がある

その1

雲ひとつない青空。容赦なく降り注ぐ陽光。油蟬の大合唱。昼下がりのうだるような暑さのなかで、扇風機すらない間借の一室で、一人汗を拭いながら天井をにらんでいた。これから起きる様々な出来事も知らず、束の間の心の平安を暑さのなかで感じていた。豪太は田舎の代名詞である丹波篠山に生まれ、自然豊かななかで暮らし、当地の高校を卒業した。そして今、逃げるようにこの田舎の鳥取の大学に来ているのだ。豪太は去年京都にいた時のことを思い出していた。

実は高校を出てから京都の大学にしばらくいたのだ。五山の送り火大文字焼で街はにぎわっていた。浴衣掛けの人々が行き交うなかを、かき分けるようにアルバイト先へ急ぐのであった。京都ではもっともにぎやかな四条川原町の角に高島屋というデパートがある。その屋上にあるビヤガーデンが彼の行き先であった。太陽はだいぶ傾いて、いよいよ数時間後には大文字に火がはいる。甲高い笑い声や会話、腰に挿したうちわ、せわしく打ち震わす扇子に、その期待感が漂っていた。しかし、豪太の心の中を占めていたのは陽子だった。彼女は同郷でしかも高校の同級生で、豪太が初めて愛を告げた人だった。陽子は、高校を卒業して、大阪の短大に進んだ。大学の寮から通学していた。豪太は京都駅から少し南に下った竹田というところで間借りしていた。恋に恋していたのかもしれない。ひと時も彼女のことを忘れることはなかった。街は雑踏の賑わいで華やいでいたが、豪太の耳には届かずに、陽子で一杯になった心だけが雑踏の中を、透明人間のようにすりぬけていくといった感じであった。

「こら、何しとるんや。」とビヤガーデンのフロアー長に怒鳴られて、豪太は自分に戻った。汚れた灰皿の回収をするはずのところを、配ったばかりの新しいのを回収していたのである。そんなことがしばしばあった。市電で大学に通う途中、車窓から、通りを歩いている陽子を見つけ、次の停留所で降りて、追っかけていったこともあった。人違いだとおもいつつも――。豪太にとって、陽子は初めて身近に感じた女性であった。不器用で朴訥な豪太にとってはかけがえのない尊い存在だった。豪太が陽子になぜ魅かれたのかは定かではないが、彼女の利発で、しかも大らかな母なるものを感じたのかもしれない。彼女が自分のことをどう思っているかなどという心の余裕は無かった。ただひたすら自分が一方的に彼女のことを思いつめていただけであった。その胸の痛むようなおもいも、そんなに長く続かなかった。彼女の「豪太とつきあっていてもおもしろくない。」の一言で終わりを告げた。「友だちとしても無理だ。」と最後通告をつきつけられた。豪太はあきらめるしか無かった。魂の抜け殻のようになって消えかかった生命の炎かろうじて維持しているだけの日々が続いたが、彼女を責める気持ちは少しも無かった。自分の力の無さが、この結果を招いたと感じていた。つまり、彼女を惹きつけるだけのものが自分には無いと思っていた。しかし、彼女への強い思いは、将来は彼女にふさわしい自分に必ず成長するのだという決意に無理やり置き換えるしかなかった。彼女とのことは青春時代の美しい思い出にそっと心の隅に置いておこうと健気に思うのだった。

天井を見つめながら、「変わらなければ――。」とつぶやいた。高校時代まで、勉強だけで精一杯、まじめなだけがとりえの自分だったのだから――

(はかない片思い)

豪太の心にぽっかりと大きな穴が空き、塞ぎきれないでいたが、それをわすれさせてくれるぐらい強烈な個性の初霜梨絵が突然目の前に現れた。豪太には今までに見たことの無いタイプの女性であった。陽光のもとで、弾ける様な命の輝きを発していた。奔放ではあるが、その声と笑顔はどこまでも明るく、全てのものが彼女をひきたたせるための脇役になってしまったかのようにさえ見えた。彼女が大学祭の実行委員になったと聞くと、豪太も後を追うように実行委員になった。淫漣とした彼女の動きと笑顔や明るく響く声を見聞きしているだけで幸せに感じた。彼女の輝きは、そう長くは続かなかった。彼女の身に何がおきたのかわからなかったが、次第に講義への欠席が目立つようになってきた。豪太自身も学生の本分よりも、どう自分を変えるかというテーマを抱えていて、興味関心が外に向いていたので、学業より音楽や山登りや友との語らい、またアルバイトに多くの時間を費やしていた。彼女と同じように、講義に欠席することが多くなっていた。そんな中で、梨絵が結婚するために大学をやめるという噂が立った。なんでも医者と結婚するらしいということであった。豪太には経緯がよくわからなかったが、彼女的意思ではないように思い、彼女の下宿先をたずねて講義に出るように説得したこともあった。そして、やがて梨絵は豪太の視界から消えていった。ずっと後年に、その噂が事実であったことを知った。

（酒と涙とアルバイトの日々）

豪太も大分鳥取や学生生活にも慣れて、アルバイトに明け暮れるという日々が続いていた。それは単なる小遣い稼ぎではなかった。もちろんお金も必要ではあったが、社会勉強といった側面が豪太には強かった。パチンコ店・深夜の警備・ビヤガーデン・郵便通送・流量調査・・・とあらゆるアルバイトをした。その中で一貫して続けていたバイトが家庭教師と「松栄」と言う名のレストラン兼喫茶店のウェイターだった。このウェイターも最初は単なるアルバイトのひとりであったが、3年の後には、その日の売り上げをレジから出して勘定することまで任されるようになっていた。お金も十分とは言えないが、好きなクラシックのレコードを買ったり、山登りの装具を買ったりする余裕が少しはできてきた。この頃、行動範囲も広がりを見せ、スナックに出入りするようになっていた。路地裏の薄暗い中にぽつりとあった「フルール」というスナックであった。年増のママが一人いるお店であったが、ママの存在が、若くて世間知らずの豪太でも安心しておれる雰囲気をつくっていた。12時をまわり、お客さんが途絶えると、ママはマイクを握っていつも「おまえに」を歌うのだ。そして店をさっさと切り上げて、近くのお店に私も一緒に食べにつれていってくれるのだった。ママには一人息子があったが、ママの息子のように可愛がってくれた。

久し振りにお店をたずねると、ママが「昨日来ていたら、ジュンちゃんがいたのに。」と言った。豪太はジュンちゃんが誰であるかをすぐに悟った。その数日後、運命とでもいうべきジュンちゃんとの再会を果たした。ジュンちゃんとは「松栄」の近くにあったヌード劇場の踊り子だったのだ。

温泉地には、たいがいこの手の見世物小屋が必ずといってもいいほどあった。鳥取にもそれがあったのだ。学生は、素面ではこの手の怪しい所には行けないのでコンパの後の二次会で、酔った勢いで、見たさ半分怖さ半分で行ったものである。豪太は生粋の田舎育ちだったのと、妙な道德観から、行ってみたいと思いつながら行けずにいたが、入学してからずっと後に、遊び人で知られていた岡山出身の小野田君に頼んで、連れて行ってもらった。大方の客は浴衣がけの温泉客であった。初めてということもあり、ドキドキしながら、待っていた。舞台に最初にとび出したのがジュンちゃんだった。豪太と目が合うなり一瞬にして恋に落ちた。豪太はそれ以来、顔しか見られなくなってしまった。気が付けば、毎日のように通っていた。入り口のお兄さんと交渉して学割というか激安にしてもらい、「松栄」でのバイト帰り道に寄っては、舞台の上のジュンちゃんと、とりとめもない会話、例えば「昨日、大山に登ってきたんや。」とか「この間来たとき、ジュンちゃんおらへんだけれど、どこ行っとったんや。」など話をしては下宿に帰っていくのだった。客は相変わらず浴衣姿の温泉客で満ちていたが、そこにいるのはジュンちゃんと豪太二人だけの世界だった。どちらも誰に気兼ねもせず、二人の会話を楽しんでいた。後年、そのことを振り返ってみれば、よくも周りが、文句も言わずに、それを許していたなあと不思議に思う。それも、そう長くは続かなかった。ジュンちゃんは突然姿を消してしまった。そして、私もそこから足が遠ざかった。

そのジュンちゃんがフルールに来ていたのである。豪太は毎日のようにフルールに通った。やがて、持ち金も少なくなり、趣味で集めていたクラシックのレコードを友だちや大学の兄貴のように慕っていた尾上先生に買ってもらっては、夜になればフルールに吸い込まれるように通うのだった。その頃、ママが暴力団下田組・組長の奥さんであることや、フルールやヌード劇場は組が経営

していることを、松栄のマスターから聞かされて知った。そんなある日、豪太が松栄でバイトをしている時、いかつい男が店の玄関から入ってくるなり、「福田はおらんか？」と大声でわめきたてた。豪太の苗字が福田であった。豪太はトレンチを持ったまま「はい、私です。」と答えると、「そこへ座れ！」と命令された。豪太は「工作中ですので。」というのと「座れ言っとるんや。」とすごまれた。豪太は、言われるままに近くの席にすわり、その男の話を聞いた。ジュンちゃんが組のある者の2号さんであるから深入りしないようにという警告と、組がかかわっているスナックに女の子が不足しているので知っている女の子を紹介してほしいということ、飲み連れて行ってあげるから指定した日に某所に来いというのがその男の要求であった。豪太はこのことをママに相談した。ママは一言「福田君、そんなん行かなくてもよい。私から（あちらに）言っておく。」で、この件は終わった。そして、間もなくジュンちゃんもフルールから姿を消した。私はその行方を追った。終にジュンちゃんがママをしている店を探し当てたが、それも束の間で二度とジュンちゃんに会うことは無かった。詳しいことはわからなかったが、フルールのママによれば、下田組を追われて鳥取から去ったということだった。またしても、一方的に幕が下りて、豪太の恋は終わってしまった。

豪太の学生生活は、学業よりもアルバイトと酒場と山歩きのワンゲルと学生運動にも少し関係し、それらが中心になって回っていたため、当然のこととして2年から3年に上がれないで留年となった。さすがの豪太も2年間の留年は避けたかったので、進級に必要な単位だけはとろうと決意した。しかし、高校の頃から、自分が何も知らない無学の徒であることはわかっていて。例えば、どんな経済の仕組みで社会は動いているのかとか、人はどう生きればいいのかなど何ひとつ自分なりの考えが無かった。無い

ということだけははっきりしていた。だから時間があれば勉強して、自分の考えをそれなりに確立したいと思って来た。自分の能力を超えたものを求めていた。そして、本屋に足繁く通うようになっていた。目に飛び込んでくる全ての本の題名は豪太を刺激した。小説から哲学や科学の専門書に至るまで、全て中味を知りたいと思った。また、同時に何も知らない自分にも驚いた。アルバイト代の大半をつぎ込んで本を買いあさった。あっという間に本の山が豪太のまわりにできて、その本に埋もれるようにして、本を読み漁った。乱読であった。自分の能力を超えていたが、わからないところは気にせずに読み飛ばした。部屋の真ん中に布団を敷き、ふとんの周りに本を積んで手当たりしだい、興味の赴くままに読んだ。ひどい時には布団から出ないで数日の間、読んでは眠り、目が覚めては読みという怠惰な生活を過ごすこともあった。こんな狂った生活の中で、何かを掴めるはずは無かった。しかしながら、哲学の唯物論を読んでいて、弁証法のところで立ち止った。そして喜びが湧いてきた。その一文に、（量的な増大が質的変化をもたらして、その繰り返しの中で発展していく）というくだりがあり、単なる文字の羅列にしかすぎなかったものが、がにわかに意味を持って立ち上がり、豪太を包み込んだのだ。「そうだ、社会も人間も変われるし変わっていくのだ」と、豪太は心の中で呟いた。簡単に言ってしまうと、努力すれば、成長するということなのだが、豪太にとっては無駄ではあるが通らねば掴めなかった。回り道をしないと簡単なことでも掴めないことだってあるのだ。

豪太は、次の壁に突き当たっていた。無い知恵で古今東西の書を読み漁って、世界がわかったと思っても、部屋から一歩外に出た瞬間に何も変わっていないことになるということだ。実際の社会の中で自己実現をどう図っていくかという問題に突き当たっていたのだ。本は相変わらず読み漁っていた。人生論・心

理学から宗教哲学や実存主義の本が中心になっていた。唯物論から形而上学へ変わっていた。ケルケゴール・ニーチェ・サルトルなど実存主義関連の本を、ほとんど意味不明のまま読んだが

ここでわかったと思ったのは、形式にとらわれなくて、真実の自己を、自ら敢然として創造していくことが大事だということだった。これも、社会の中で、自分らしさを出しながら生きていこうということである。自分を押し殺して生きるのではなく、自分の思いや自分らしさを出して生きようということだろうか。このことを観念的に知るのにも豪太は多くの時間とお金とを浪費したのだ。

豪太は、ただ部屋に閉じこもっているばかりではなかった。同じ山歩きの仲間と徹夜で論議したことも度々あった。全く主義主張の違う仲間と話し合うこともあった。そんな相手でも、この世をまじめに真剣に生きている人であれば、好感を持って話し合えた。